

福島第一原子力発電所 視察

【6月11日】

小林喜光代表幹事ほか15人は、福島第一原子力発電所を2年ぶりに訪問し、1～4号機の廃炉進捗状況、汚染水対策などを視察。厳しい現場で働く方々を激励した。



廃炉作業は着実に進展 蓄積した技術で世界への貢献を期待

今回の視察は、小名浜でのスタートアップミーティングの翌日に行われた。経済同友会による同原発の視察は4回目、小早川智明東京電力代表執行役社長、小野明常務執行役（福島第一廃炉推進カンパニー・プレジデント兼廃炉・汚染水対策最高責任者）にご同行をいただいた。

入構は厳重なセキュリティ管理が施されていた。前回と大きく異なったのは放射能に対する防護だ。前はタイベックという、全身を覆う防護服の着用が必要だったが、今回は防じんマスクに軍手、線量計を着用するための（放射能を避けるためではない）不織布製ベスト、安全靴、ヘルメットという軽装備での視察が可能となっていた。当日はあいにく台風の影響を受けた強雨だったため、構内視察バスから降りての視察は果たせなかったが、今では、長時間でなけ

れば1～4号機原子炉建屋の直前まで、この装備で近づくことができるそうだ。また、表土をはぎ取ってモルタルを吹き付けるフェーシングやがれき撤去などの効果により、3号機原子炉建屋周辺では線量が2年前の毎時0.4ミリシーベルトから、毎時0.1ミリシーベルトへと、大きく下がっていた。

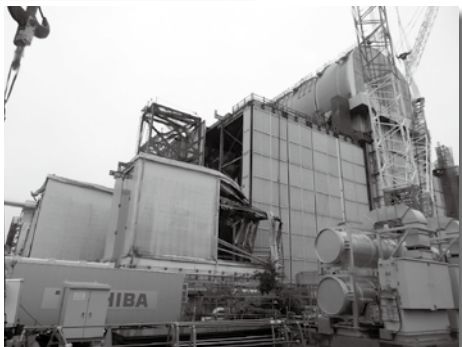
1～4号機の現状だが、4号機は震災当時メンテナンス中で原子炉に核燃料がなかったため、メルトダウンには至っておらず、また、すでに使用済み燃料の取り出しも終了しており、核燃料のリスクは取り除かれている。現在は、1～3号機の廃炉作業に取り組んでいる。3号機は使用済み燃料を取り出すためのリモートコントロール・クレーンなどの装置と、それを覆うカマボコ状のカバーが建屋上部に設置され、2018年の中ごろには取り出しが開始される計画だ。2号機は建屋内部の線量・汚染状況の調査に向けて建屋壁面に横穴を空ける作業が進んでいる。建屋上部が大きく損傷した1号機もオペレーティングフロアのがれきを撤去中とのことだ。前回視察をした「凍土遮水壁」は2018年3月に設置が完了し、ほぼ全ての範囲で地中温度が0℃を下回る状態で機能をしているとのこと。汚染水の処理施設である多核種除去設備は1日2,000トンの処理能力を有し、浄化された水は敷地内のタンクで保管されている。汚染水の発生量も抑制され、タンクの増設ペースも当初に比べるとだいぶ下がったそうだ。

前は震災の際にコントロールセンターとなった免震重要棟の視察も併せて行ったが、作業の進展に伴い手狭になったため新事務本館が建てられ、ここで職員の皆さんにお会いすることができた。小林代表幹事は「大変困難な仕事に、あらゆる技術を結集して立ち向かわれている皆さんに感謝をしたい。廃炉はいずれ世界各国で行われる。皆さんの蓄積がいずれ世界に大きく貢献する」と語り、激励品の目録を磯貝智彦福島第一原子力発電所長にお渡しした。

震災から7年余り、多くの人の力が結集され、廃炉に向けて確かに進んでいることを実感した視察となった。



2号機原子炉建屋



3号機原子炉建屋